

永遠幼稚園

2025/7/03

第7稿

山本健介

この戯曲は一人で演じる事を想定しているが、複数人で演じても構わない。また、セリフで状況説明や動作、仕草を説明しているところもある。それらは省略しても構わない。ここに書かれたセリフは、発声されることを必須とは考えていない。

1 サエキタケの自己紹介。

舞台美術は特に必要としない。椅子など使っても構わない。

サエキタケが現れる。

幼稚園児にも、そうでないようにも、両方にも見える容姿。

サエキタケ「そうは見えないかもしれないが、幼稚園に通っている。

今は、5歳。次の誕生日で、6歳になる。たしかに私は幼稚園児なのかもしれない。

でもそう思われるのは、好きではない。幼稚園にいる間私は、だいたい、ムツとしている。だからだろうか。私に接してくる大人たちは皆、ピリついているような気がする。私が、父親のいない家庭で育っているという事もあるのだろうか。

……『忘れ物はない？ 名札は、つけた？』と、母の声がある。

名札をポケットから取り出す。

2

サエキタケ「サエキ・タケという名前。タケという名前は父親がつけたらしい。竹のように育ってほしいとのことだが、詳しい事は分からない。」

バスが来たらしい。

サエキタケ「スクールバスがやってきた。目の前で自動ドアが開いた時、ゴーツという音。

皆、窓の外を見る。飛行機が、低空飛行で飛んでいる。窓際の男子が、その飛行機に向かって手を振っている。今日は、空が青い。」

2 スクールバス

サエキタケはバスに乗り込む。

サエキタケ「バスの、一番後部座席の、中央の席。

別に望んでこの席に座るわけじゃない。スクールバスのお迎えの順番が一番最後だから、最後まで空いているのがいつもこの席というだけだ。

右側に女子。左側には男子。いつの間にか、決まりごとのように、そうなってしまった。お互いが話すようなことはない。

「よすーよすよす」とキクタハルトがグーで殴ってくる。

まあ、はは、まあまあ……。」「よすー」と、グーで殴ってくる、キクタハルト。

ああ、まあまあ……。私は苦笑いでパンチを尻で受けていると、

「バスの中は静かにしてください。」

シンと静まり返る。

タナカアマネだ。

その声は私にはなく、前方に座るミツタヨシノブに投げられた。先ほどの飛行機について話題にし、興奮して笑っていたところを、タナカアマネが注意したのだ。

「うるさいです。わたなべみさと先生に言います」。

……。なんで、タナカアマネは、いちいちわたなべみさと先生に報告するんだ。」

3 わたなべみさと先生と、タナカアマネ

サエキタケ「わたなべみさと先生は、とても恐ろしい。

「何で騒いだりしたの」

と、何かあると、わたなべみさと先生は、わたしたち男子に問う。

「何でこんなことをしたの」

「何でよくないと分かってこんなことをしたの」

「何でなの」

私たち男子は答えられない。……。24歳。身長は150センチもあり、わたなべみさと先生は、そのはるか高いところから、私たちを見下ろしてくる。

わたなべみさと先生はさらに、スクールバスの中の、男子と女子が断絶している事にも言及する。

「どうして、男子と女子で、仲良くしないの。」

この分断の原因は、タナカアマネにある。

タナカアマネを中心とした女子たちが、男子の小さな過ちを許さず、何度も何度も指摘をするからだ。

この問題を、わたなべみさと先生に、私は一度言った、訴えた。うまく説明できなかったかもしれないけど、女子が、男子の悪いところをいつも言うし、いつもだめだ、だめだと否定する。だから、男子は、女子に、話さないんだ、と。

でも、わたなべみさと先生はただ一言。

「仲良くしなさい。」と。

私は、この教えだけは、受け入れられない。仲良くなどは、できない。

だから私は、この分断の原因である、タナカアマネに戦いを挑もうと思っている。

男子として、女子と、戦わなくてはならない。正々堂々。私は、年長クラスなのだ。この幼稚園における、最高学年なんだ。

もうすぐ幼稚園を卒業になる。それまでに、決着をつけなければ。」

4 登園

サエキタケ「スクールバスは停車し、園児たちが順番に降りてゆく。「おはよう、ございます」と、歌うように言うのが、私には違和感がある。

私は今日こそ、ふつうの大人が社会でするような「おはようございます」を言うつもりだ。だが、急に言い方を変えたら、先生や運転手さんに、元気がないと思わせてしまうのではないか。気を遣わせてしまうのではないか――。

「おはようございます」と、静かで、自然な、大人の言い回しがきこえてきた。タナカアマネだ。

タナカアマネは、私がやろうとしていた挨拶のトーンを、もう既に、やっていた。

「おいターケ」と、キクタハルトはグーでまた私の尻を殴り、下車を促す。

「……ちよっ」と、私はためらうが、バスの構造上、私が椅子から立たねばキクタハルト他4名は降りれない。

やむなく、不本意ながら……「おは、よう、ございます、ます」。

バスを降りる

サエキタケ「はい、元気に挨拶出来ました、と、幼稚園で私たちを出迎える、わたなべみさと先生の声。

先生、違ούνです。

本当はこんなじゃない。そう思うと、少し悔しく、恥ずかしく、下を向いて、走って園内へ駆けだした。

「あ、また飛行機」の声。

ゴーツという音。また、低空飛行で飛んでいく飛行機。

「エフ35エーだよ。エフ35エー！」

男子も女子も、誰もが天をふりさけ見る。そして、手を振る。

私もだ。飛行機の魔力には、どんな人間とてかなわない。だが、タナカアマネはその時、下を向いていた。」

5 自由遊び時間

幼稚園内に入り、お靴を脱ぎ下駄箱にしまうタケ

サエキタケ「自由遊び時間。今から10時まで、私たちにはつかの間の自由がこの幼稚園で与えられる。自由だが、遊ばなくてはならない時間。」

私は、この10時までの自由の中で、タナカアマネと戦う機を伺っていた。

10時以降、先生がお部屋に入ってくると、先生は私たち一人一人をよく見る。特にわたなべみさと先生は、我々ひとりひとりの表情まで見ている。私が下を向いていたたり、歯グキに何か挟まっていたものを取ろうとしていたときなど、すかさず、

「タケ君」と。「どうしましたか?」と……尋ねてくる。

恐ろしい。少しの油断もできない。元気を見せなければ。私は、この園にいる間、元気になる以外の事を許されていない。

タナカアマネは、今日は何もしていなかった。

幼稚園において、そんなことは異様だ。とかく、われわれの日常は常に遊びを伴うものだ。現に私だって、タナカアマネの様子を見、機を伺いながらも、手はブロック遊びに精を出している。

ちなみにだが、園内のブロックは古いものと新しいツルツルのものと二種類あって、どちらも組み合わせられるんだけど、剣を作るにはツルツルのものじゃないと手に持った時全体の接続が崩れてバラバラになってしまうから、剣を作るためには早めに新ブロック——私たち男子の間では、「シン」と呼んでるんだけど、シンは、女子たちにも「きれいだから」という理由で、手早く確保されてしまう。私は使われないなら貸してって言うけど、女子はそれを拒否する。私が抗議すると、いつもタナカアマネが——。

タナカアマネはどうした? タナカアマネが、教室の中にいない。

「おいタアケエ」と、背中から、キクタハルトが殴ってくる。

「おれのパンチくらいよけらんないようじゃマジでお前一生弱いまんまだから——」と絡んでくる。今はそんな場合じゃないんだ。

10時になってしまう。

私たちは、10時までにお片付けをし、席につかねばならない。自由はそこで終わる。

ああ、もう時間がない。いつだって時は早く過ぎる。いつだって取り返しがつかない。

私は、確保したシンのブロックをキクタハルトに渡すと、タナカアマネを探した。

どこだ? 教室の中には、いない? どこにもいない。

「おいタアケエ、しょんべんかあ?」

キクタハルトが、教室を出ようと扉に手をかけている私の背中を蹴ってくる。

サエキタケ、へらへらし、ごまかし、男子幼稚園児っぽいなあって仕草をする。

サエキタケ「……正直、キクタハルトとは関わりたくはない。しかし、男子同士、そこは、社会なんだから。ビジネスなんだから。私はへらへらし「みんなと仲良くする」というビジネスをやる。社会をやりながら、こなしながら、さりげなく、教室の、外へ。」

6 廊下

サエキタケ「タナカアマネは、いた。廊下に一人。」

階段の近くの下駄箱のエリアにいて、あれは、年少の保育クラスの人たちのエリアだ。年長さんが立ち入ってはいけない禁止エリアに、タナカアマネ。

まもなく10時。それまでにお席に座らないといけないのに、タナカアマネは、いったい何を。」

振り返る。驚くサエキタケ。

サエキタケ「巨大な、わたなべみさと先生がそこにいた。」

「どうしたの？ おトイレに行きたいの？」

……頭が真っ白になった。

どうすればいい。

大前提として……ウソを、ついてはいけない。ウソは良くないと、私は様々な童話で学んでいた。ウソをつくのは、短絡的な子供や、オオカミや、政治家がやることだ。

……言えない。「タナカアマネと、たたかわないといけないから……」なんて言ったら、先生はきつと「なんで戦おうとしたの」と質問してくる。

それを説明するには、永遠の時間がある。そしてその永遠を、先生は待ってくれない。いままでずっとそうだった。説明をしたくて、考えている間に、わたなべみさと先生は、いつも、先へ行ってしまふ。

「お部屋に入ってください」

私は答えられず、下を向きながら、教室へ。

園児たちはわたなべみさと先生の姿を認めると、大慌てで席につく。

しかし、わたなべみさと先生は、

「10時になりましたが、自由遊び時間を延長します。皆さんはお教室の中で、そのまま遊びの続きをしてください」。

静寂。

やがて、園児たちからは「わーっ」という喝采の声と、すこしだけ戸惑いの声上がる。私も困惑した。

こんなこと、二年間の長い幼稚園生活で初めての事だ。

「お部屋の中に居てくださいね」

そう言い残すと先生は笑顔で、しかし小走りで廊下へ行った。副担任のコバヤシ先生や、他の年長クラス、年中さんクラスの先生方、英語の先生のミスターペンも、廊下を通り過ぎていく。別棟の、園長先生室に向かっていったようだ。

自由が、延長された。これは僥倖だ。他の組の先生たちもこの建物に居ない。教室中が自由の延長に浮かれ、大騒ぎになっている隙を見、私は教室を抜け出し、廊下に出た。

7 ふたたび廊下

廊下に行くサエキタケ。

サエキタケ「今、私は、悪い事をしている。先生のいいつけに、はつきりと逆らっている。外の風が、頬を通り過ぎる。それが涼しい。……もっと怖いかと思ったのに。しかしタナカアマネの姿はない。」

探索するサエキタケ。

赤と緑のカラーボールを発見する。

サエキタケ「赤と、緑のカラーボール……。赤は、女の色だ。赤いボールを男が触ると、女キンがうつって、男子たちから仲間外れにされる。女キンに感染したら、お昼のドツヂボールに入れてもらえなくなるから——」

サエキタケ、ためらっている。ふと、気配に気づく。

サエキタケ「タナカアマネが、こちらを見ていた。」

その腕には、カラーボール。数えきれないほどの、赤だけじゃない、白、黄色、黒、青、コン、ビリジアン、ゴールデン、マール、春の日の孔雀色……。

タナカアマネは、私を見、そして、近づく。

赤の玉と、私が手にしていた緑の玉を、取る。無言で。

そして、タナカアマネは、無言で、そのまま、後ろの階段へ、手に抱えたたくさん玉をこぼさないよう、ゆっくりと階段を登っていく。

ゆっくりと、登っていく？ 階段を——？

それは——やっちゃいけないことだ。園児が一人で、勝手に二階に上がるなんて、許されない。なぜなら、階段は危険だから。だから登っちゃいけないって。一人で行っていい場所じゃないって。階段を上る時は、かならず先生と一緒にって、そのときだって、一段とぼしで登っちゃいけない。危ないから。危ないから。でも、タナカアマネは登っていく！ 一人で、階段を、登っていく！ なんだ。なんで？ なんで登る？ あの大量のカラーボールは何？ ……なんでタナカアマネは、ひとりなんだ？」

8 多目的室

ためらった後、階段を登るサエキタケ。

サエキタケ「階段を上りきると、二階にある多目的室のドアは開いていた。私はその木製の引き戸に、手を、かけた。」

サエキタケは、部屋に入ると、その窓際にタナカアマネがいる。
ここから、俳優はタナカアマネを演じる。

タナカアマネ「(タケに気づく)……サエキ、タケ?」

サエキタケをじっと見つめるタナカ。しばらく見つめる。

タナカアマネ「……。わたなべみさと先生に、言う?」

沈黙。

タナカアマネ「……。二階からボールを投げたら、一階で投げるより、遠くに飛ばせるんじゃないかな、って」

タナカアマネ、ボールを投げる。

タナカアマネ「なんでさあ、二階に上がっちゃいけないのかわかって……。 (笑って) 落ちないよ。落ちるわけじゃないじゃん。私、落ちないし。……。」

タナカアマネ、ふと、ボールの一つを手に取り

タナカアマネ「やる? ……。なんで? やんないの? ……。なんで? やんないの? ……。 (笑って) あぶなくないよ。下に人、いないよ? ボールだって、やわらかいじゃん。なんでやんないの? ……。 (笑って) 別に。楽しくないよ。私さあ、何にも楽しくないよ。なんかさあ、……つまんなくない? ……今って。」

タナカアマネ「……二階から物をおとしたことある? ……わたし、あるよ。」

タナカアマネ「……こわいんだ。」

タナカアマネ「……今日もさあ、ここ、つくまで、いつも通りしようって思ってたんだけど。」

やや長い沈黙。

タナカアマネ「……わたし、タナカアマネじゃないよ。」

間。

タナカアマネ「シノミヤ、アマネなんだよ。今日から。」

タナカアマネ、ふと、手にしたボール。

タナカアマネ「見て、これ、春の日の孔雀色。光で色が変わるんだよ。……ほら。ほら……。」

タナカアマネ、サエキタケに近づく。

ふいに、俳優は役を入れ替り、サエキタケを演じる。

サエキタケ「決闘してください！」

手を差し出すサエキタケ

サエキタケ「……。タナカアマネは首をかしげた。春の日の孔雀色の玉を持ち、私の目の前にいるタナカアマネ。

近くで見ると、タナカアマネは、でかい。

私より、背が、10センチも高い。私は、少しだけ、後ずさる。

だが、ここで私は怯んじやいけない。「決闘、してください！」って、もう一度。

「決闘って、何？」と半笑いのタナカアマネ。近づいてくる。「だから、戦うんだ」って。

「いつも、女子はズルいし、いつも、女子は、わたなべみさと先生に男子の事を悪く言うから、男子がいつも悪いって事になってるから！」って。

「ああー」って。タナカアマネ。「分かったよ。……じゃ負けた方は勝った方のいうことを聞く？」って、タナカアマネは笑いながら言うけど、

「そういうんじゃないから！」……そういうんじゃないんだ、決闘って。負けたら罰ゲームとかそういうんじゃない。私は、真剣に、女子と、タナカアマネと、戦いたい。

だって、今しかないから。

今、たまたま自由時間になってるだけで、こんな時間は、きっともう来ないから。

知ってるから。男子と女子が、対等な条件でいられるのは、この幼稚園時代しかないって。この先、私たちが成長したら、男女の差が大きくなって、不平等になる。私は知っているんだ。私たちの未来は、今のままではいられない。

だから、今しかないんだ。今。タナカアマネと対等でいられて、男の私が全力で戦って、ズルじゃないのって、この幼稚園時代という、特別な時間にしかない……今しかないんだ。」

9 グラウンド

サエキタケ「二階から階段を降りる。階段を、一つ飛ばしで降りていく。振り向く。タナカアマネはあとからゆっくりと、降りてくる。

私たちは、走ることにした。

戦いと言っても、私たちは、殺し合いがしたいわけじゃない。バトルなんて、そんなドラゴンボールみたいなもの、子供の漫画じゃないんだから。

園庭には、楕円を半分にしたみたいなコースが白線で引かれている。全長、50メートルのスーパーロングコース。50メートルって、小学生が走る距離だから。この広い園庭でも50メートルは直線では収まらず、Uの字になっていて、とてつもなく長い。

教室からは、自由遊び時間の延長に興奮している子供たちの声。まるで、歓声のようだ。

「……早くゴールについた方が、勝ちだから」と私はタナカアマネに告げる。

タナカアマネは、吊りスカートの登園制服のままだ。ふと、スカートは走りに影響するの
か？ と懸念したが、タナカアマネは内側のレーンに入る。問題は、ないっぼい。

その時、チャイムー。普段だったら、朝の会が終わって、無駄な何かをやらされ始める
合図だ。

「チャイムの、最後の「コーン」がきこえたら、スタートだからね」と、私が告げると、タ
ナカアマネは小さくうなづく。余裕なのか、少し笑みを浮かべて。」

キーン、コーン、カーン、コーンの音。

サエキタケ「私は外側のレーンにつく」

キーン、コーン、カーン、コーン

サエキタケ「この時点で、ふと、私は気づいた。もしかしたら、外側のレーンは、不利な
ではないか、と。」

キーン、コーン、カーン、コーン……（SEがどんどん遅くなっていく）

サエキタケ「コースは、20メートルの前方で大きく左に曲がる。その時、だから、外側
で、少し余計に走らなければいけないのか……？」

コーン——カーン——キーン……

サエキタケ「あれだ、オリンピックか何かの映像を見た時、なぜか選手、スタート位置が斜めになっているのを見たことがあり、あれ、ズルじゃないのか？ って疑問に思ったことがあったんだけど、アツ、これ、そういうことか！ と、外側は膨らんでいるから、距離が遠くなるから、だから、そうか、え、じゃあ、これは——」

コーンッ！！ (重い音)

サエキタケ「スタートするタナカアマネ！ 私もあわててスタートを切る！ スタートダッシュ、出遅れた。」

タナカアマネ、速い！ なんて速さだ。タナカアマネは背も高い。足の早いグループの女子。なのに、そのグループの女子たちとは遊ばず、いつも少し太っているグループの女子たちと話をしている、タナカアマネ！

タナカアマネの身体が、斜めに、左に、曲がる！

うしろ姿が見えるってことは、私が、負けているって事。

砂埃を挙げて走るタナカアマネ。翻るスカート。通り過ぎる風、冷たく、頬を切って。負けるのか？

自分から決闘を挑んでおいて、負けるのか？

ここで負けたら、私はどうなる？

一生、女子のいう事を聞かなくてはいけないのか？ いや、別にそんな約束はしてない。

この決闘を負けたって、なんにも変わらない。

勝っても、負けても、何も変わらない。

いつもと同じ日常。永遠が続く。

でも、勝たなきゃ。勝たなきゃって。

それは私が、男子だからそう思うのか？

タナカアマネはそう思わないのか。女子は、人は、そんなこと思わないのか。そもそもなんで、タナカアマネはこの戦いを了承してくれたのか？ 女子にとって、いや、タナカアマネにとって、戦ってなんだ？

突き放されていく。カーブを曲がり終えた頃、タナカアマネの背中が、完全に見える。走る事、そもそも私は、得意じゃなかった。でも、戦って、得意とか、得意じゃないとか、向いてるとか向いてないとかそういう事じゃないじゃないと思うから。

「タアケエ……」

こんな時、頭の中で、ビジネス仲良しのキクタハルトの声が響く。

「お前、走るの遅くて弱ええけど、裏技教えてやんよう」

そんなこと、ちょっと前にキクタハルトは言っていた気がする。裏技？ 裏技って何？

「目えつぶるんだよ」

目をつぶる？

「人間は、見た目で全部判断しちゃうから、だから、人間の神経の大半が目にもってかれるんよ。運動神経も全部そう。だから、目を閉じるんだ。そうすつと、人間の集中力は跳ね上がって、自分の力、全部運動神経に使えっから。俺、お父さんがよく俺の事殴ってくるんだけど、お父さん、俺に乗っかってきて、弱ええ弱ええつてずつと俺の顔、殴つてくんだよ。」

「泣けば終りだと思うな」ってお父さん。永遠。やめてくんないの。そんな時、俺えー、目え閉じんだよ。目を閉じて、防御すんの。そうすつと、目を閉じた分の神経が、全部防御にいつて、俺、お父さんに永遠殴られても泣かないようになったかんね。目を閉じてる間は、俺、強い。強くなつてんの。お父さんに殴られても、泣かなくなつたし、俺、負けなくなつた。だから、タケエ、目を閉じる。全神経を走ることに集中しろ。タケエ。勝て。タケエ、走れ、タアケエ！」

目を閉じるサエキタケ。

やがてサエキタケ、ゆっくり、倒れる。

サエキタケ「えっ」

タケ、目を覚ます。タナカアマネは少し離れたところにいるらしい。

サエキタケ「何やってんの？」と、タナカアマネの声。私は、立ち上がる。頭が痛い。

……。

「負けた？」私は尋ねる。タナカアマネは笑う。「ゴールどこか、決めてなかったじゃん」。

タナカアマネ、園を囲うブロック塀に座っている。ああ、そうかゴール。決めてないと、そうか、そうだよな。どこまで走るか、決めてなかったもんな。」

笑う二人。タナカは塀を乗り越えて、向こう側へ。

タナカアマネ「……来る？」

タナカアマネは手を差し出す。

沈黙。

タケ、逡巡の後、その差し出された手を取り、塀を乗り越えた。

サエキタケ「――幼稚園の外は、どこまでも同じような住宅街が広がっている。ここはかつて、ニュータウンと言われたらしい。

街に、誰も歩いていない。

静かだ、と思った。とても、静かな。

私たちはどこに向かっているんだろう。ゴールは、どこかにあるのか。

「さっきさ」と、不意にタナカアマネがいう。」

タナカアマネ「男子と女子が、対等でいられるのは、この幼稚園時代しかないって。言っていたじゃん」

間。歩きながら

タナカアマネ「そんなことないから」

間。歩きながら。

タナカアマネ「ウチのお父さんもさ。お母さんもさ。ちゃんと二人で話しあっていたから。ちゃんと、お互い、話し合って、決めたことだから。だから、男と女が対等じゃないとか、どっちかが我慢しなくちゃいけないとか。……。もう、そんなことは、ないから。」

サイレンの音。

サエキタケ「たくさん鳥が、ばさばさと飛ぶ。遠くに、パトカーのピーポの音も聞こえる。幼稚園の……。わたなべみさと先生が、私たちの脱出を知り、通報したのだろうか？ 町全体が、言いつけを破った私たちを、捕まえようとしているのか？

タナカアマネを見る。タナカアマネは、無表情だ。

わからないけれど。タナカアマネは多分、家ではこんな顔を、ずっとしてるんじゃないか。幼稚園の時は、もっと違う顔だった。

タナカアマネは、この顔をしに、幼稚園の外に出てきたのだろうか。

――誰かの家から、テレビの音が聞こえてきた。「――逃げて下さい。急いで、逃げてください。命を守るため、いますぐ逃げてください」って、テレビのアナウンサーの声。でも、普段と違う。すごい怖い声。」

テレビアナウンサー「命をまもるため、逃げてください。」

ドーンという音。後、不穏な音が広がっていく。

サエキタケ「今さらになって、私は足が痛い。足だけじゃない。全身痛い。さっきの園庭で対決したとき、多分私は、派手に転んで、強く打ったのだ。」

「サエキタケ……」とタナカアマネが、私の名を呼ぶ。私の名を、呼んでいる。

タケ……タケ……？

ふと、私が指さしたのは、竹藪だった。」

1-1 竹藪

サエキタケ「近道なんだよ」。……ニュータウンの中、小高くなっている場所がある。「どこへ？」ってタナカアマネ。「ねえ、どこへ行くの？」

そこは、竹藪で茂みになっていて、

前——すぐく前。もう、2年も前の話。私がまだ、子供だった頃。幼稚園の年少クラスの時、一度だけ父に、もういない父に、延長保育で迎えに来てもらったことがある。

慣れない延長保育の、終わらない時間への恐怖で、私は泣いていた。あの頃は子供だったから。

父は自転車でやってくると、先生に礼をして、泣き続ける私を自転車の、前の座席に乗せた。

やがて、この道にさしかかり。

「近道なんだよ」って。父。壁のように竹藪が茂る中、ぼっかりと一か所だけ、穴の開いたような場所があった。

私と父は、自転車のまま、その中へ突っ込んでいった。

この道を抜けたら、はたして、どこにつながっていたんだったか。

私とタナカアマネは、その中に入る。

竹の葉が、もさもさもさつと私たちの両肩に。父は、あの時、ゲラゲラ笑っていた。私の顔面に竹の葉がもさもさもさつたりなり、ゲラゲラゲラつと笑って、竹だぞ、タケ。これが、竹だぞ、つて笑っていた。もさもさもさ、もさもさ、もさもさの竹藪。暗く、乱雑でデタラメで、父は笑う。ゲラゲラ笑う。これが、竹なのか、私なのか。父は私に、こう、なっしてほしいのか？

私は、タナカアマネの手を引いていた。もさもさ、もさもさ、もさもさを超え……
やがて、竹やぶのもさもさが途切れる。

バツと開けた光景。藪を抜けた先は、丘のようになっていて、私たちの住む街が一望できる場所だった。

黒い煙が、いくつか立ちのぼっていた。」

12 丘

サエキタケ「遠くには、川。その向こう、川の向こう。あそこは、この街より大きな街で、いつか私が自転車に乗る事が出来たら、行ってみようと思っていた街。

その街は、燃えているようだった。

飛行機が、また、低空飛行で、轟音を響かせる。あれはF35Aという、自衛隊の戦闘機だと、将来は、飛行機になりたいというミツタヨシノブが教えてくれたことがあった。

戦闘機は、編隊を組んで、その煙の、向こうへ。

また、遠くでドーンという音がした。

また、ドーンという音が。

また、音。

あれは孔雀色の光。

そして、また、音。

煙が、立ちのぼっている。

私とタナカアマネは、手をつなぎながら、その光景をただ、見ていた。

見慣れたバスが、眼下の曲がりくねった道に止まった。中から、人が出てくる。

「タケ君！ アマネさん！」

わたなべみさと先生だ。

わたなべみさと先生は、丘の上に立つ私たちのいるところへ向かってくる。急な坂になっているこの場所。かまわず、先生は駆け上がる。態勢がよろめき、二本の手を地面について、猫のように、犬のように私たちの所へ。

そして、私たちの目の前に現れ、両手を広げ、私たちを抱きしめようとした。

二人の間を抱きしめきるには、先生の両腕の大きさは、少し足りなかった。

「なんですか。」

先生が泣いているのは。怒りにきたのではないのですか。

「ごめんなさい」

と、わたなべみさと先生は言った。」

13 スクールバス

サエキタケ「バスの中には、園児たち数名がいた。」

だが、誰もおしゃべりなどせず、ぼんやりと、外の様子を見たり、つかれて眠ったりしている者もいた。キクタハルトの姿はなかった。理由は分からない。バスは途中、いつもとは違う場所で止まり、その都度園児たちがひとり、またひとりと降りてゆく。半狂乱の母親が園児たちを抱きしめ、何か声をかけている。「ごめんなさい」と、言っているのだろうか。先生は、さっき、何に對して謝ったんだろう。

タナカアマネを見る。

私は、今日、タナカアマネと戦ったんだよな、と思った。ゴールにはたどり着かなかったから、決着はついていないけれど。けど、戦ったんだよな。

バスが止まる。

「サエキタケ君」

先生の声。私の家の近くではない。だが、母親が立っていた。荷物を抱えている。

母だけではない。何人か、母親と同じように、憔悴した顔で、誰かを待っている大人たちの姿が見えた。

ああ、と思った。これから私は、あの人たちと一緒に避難をするのだな。

名札を付けよう。

この先、母とはぐれた時、周囲の大人たちが私を認識しやすくなる。また、例えば、何らかの爆発に巻き込まれ、倒れ、私が死んだときに、名札があった方が判別もしやすいだろう。」

名札をポケットから取り出す。

サエキタケ「安全ピンを服に突き刺す……これくらいは、ひとりで、もうできる。」

「先生、さようなら」。

バスを降りた時、私は大人たちに一礼をし、頭をあげる。

最後に、タナカアマネを見た。タナカアマネは、窓の外を眺めていた。反射で映るその顔。無表情。……いま、私がああ顔をしたら、母は傷つくかもしれない。

そう思った私は、母親のほうに向くと、笑顔で、そう、笑顔で。父が、竹藪をガラガラ笑いながら突っ切ったような顔で、駆け寄っていった。

我ながら、子どもじみた顔が出来たような気がする。

……そう見えるかどうかは、わからないけれども。」

サエキタケ、しばらく下を向いていたが、不意に顔を上げる。

○その顔、笑っている。その瞬間、暗転——。(了)